

17世紀から18世紀にみられる被衣風習の推移(京都・江戸)

— 芹沢銈介コレクション 庄内被衣より —

奈良 綾

Transition of 'Katsugi (lady's veils)' customs in Kyoto and Edo between the 17th and 18th centuries

NARA Aya

キーワード : 被衣 藍染織品 17～18世紀

要旨

東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館には、型絵染の人間国宝・芹沢銈介の作品と、芹沢が収集した世界各国の工芸品が所蔵されている。芹沢は、様々な国々の民族が生活の中で用いていた工芸品のコレクターでもあり、その内容はアフリカの仮面・扉等の木工品や土器・土偶、中南米・東南アジア・インドの染織品や装身具など多岐にわたる。中には、絞り・型染・筒描・絣などの技法を用いた衣裳や裂など、日本の藍染織品も含まれており、「被衣」と呼ばれる着物形態の被りものが存在する。この資料に関して詳細があまり知られていないことが契機となり、調査を開始し現在に至っている。

平安末期、都で用いられ始めた被衣は、後に風習として日本各地へと広がっていく。その長く続く系譜の中で、他地域への影響を及ぼしたという点で注目されるべきは、江戸・京都における慣習といえるだろう。当館の被衣資料の蒐集地・山形県における被衣を調査するにあたり、関わりの深い2都市の慣習を知る事がまず前提となる。そこで、今回は地域を江戸・京都に限り、文献史料と現存資料を提示して探る。

Abstract

There are thousands of works by Serizawa Keisuke and a thousand of his collections of folk crafts from around the world in Serizawa Keisuke Art and Craft Museum at Tohoku Fukushi University. He was designated as a Holder of an Important Intangible Cultural Property, or Living National Treasure, for his stencil dyeing technique in 1956. He was also a great collector of crafts that people from various ethnic groups or countries actually had used in their real life, ranging from African primitive arts such as wooden masks and doors and earthen vessels and figures to Incan and Asian textiles, ornaments, and folk arts and crafts. Japanese indigo-dyeing textiles are included in those collections. I've been doing research into *kimono*-shaped veil known as *Katsugi* (literally, lady's veils), which belongs to this group of Japanese costumes and cloth made by using indigo dyeing techniques like tie-dyeing, stencil dyeing, *tsutsugaki* (paste resist indigo dyeing) and *ikat*. I started doing research on *Katsugi* because it has not been generally known or examined in details.

Katsugi began to be used in ancient cities at the end of the Heian Period and gradually spread across Japan as a clothing custom. In its long-running development, we may say that the *Katsugi* customs were well-established especially at Edo and Kyoto. Our museum has collected *Katsugi* found in Yamagata Prefecture. But first of all, I would like to present the literate data of Edo and Kyoto, and analyze them in this article. In next paper, I am going to present the data of *Katsugi* in Yamagata and compare them to the customs in Edo and Kyoto.

はじめに

被衣とは、外出の際に着物形態の衣裳を頭から被る風習、もしくは被る衣裳そのものを指す。その被衣資料が当館所蔵の芹沢銈介コレクションに存在する。

被衣に施された意匠は藍の濃淡で表現され、型から生まれた規則的な文様と、筒描で描かれたのびやかな文様の組合せによって大胆に構成されている。顔を隠すという奥ゆかしい

風習に用いるものでありながら、配された文様にゆるぎない強さを持ち、実直な印象を与えるものである。この藍染衣裳は、卓越した文様構成を持つ資料といえるのではないだろうか。

被ることを目的とした染織衣裳は、民藝運動の創始者・柳宗悦によって見出され「庄内被衣」と名が与えられた¹⁾。蒐集地である山形県庄内地方において、この風習が見られなくなり60年以上が経過している²⁾。庄内を始め、各地に残された被衣は優れた染織資料でありながら、これまで主要な研究は着手されていなかった。そこで、当館所蔵の資料であった被衣の継続調査を行い現在に至っている。

近世に刊行された随筆や故実書等には被衣の記述をみることが出来る。しかし、服飾通史においてはあまり注目されておらず、被衣が付属物扱いとみなされ、関心が持たれなかったとも考えられる。しかし、日本美術史に残る有名な絵巻物や近世初期風俗画には、被衣姿の女性達が数多く描かれており、その時代における被衣の流行をみる事が出来るのである。

これまで、筆者は被衣が描かれた絵画資料や関連文献によって、当時の使用状況を探り、絵画と現存資料の比較を行ってきた。その中で被衣以前のかぶりものや、江戸や京都における被衣風習の起源とされる平安時代後期頃から江戸後期までの情況、伝播した地方における風習の消失時期の推測、現存する被衣資料の分類などの内容³⁾を述べた。

その後の調査において、江戸・京都の被衣慣習における記述や、現存被衣資料と近似する絵画の存在など新たな資料を数多く収集することが出来た。その研究から、平安後期に高貴な女性が用い始めた被衣は、時代ともに着用法や衣裳形態を変え江戸期まで続くが、17世紀初頭、被衣は貴賤、都鄙に至るまでの広範囲で使用された訳ではなく、中流階級以上の女性達のものであったと考えられ、その後のいくつかの起因によって被衣慣習の変化をもたらすことが分かってきた。

そこで今回は、公家文化に始まった被衣風習が、京都での発展、当時派生して流行していた江戸での衰退原因、そして地方への伝播の時期とされる17~18世紀に焦点を置いた考察を行いたい。

当館所蔵被衣資料の蒐集地といわれる庄内地方の被衣風習を精査するにあたり、まずは江戸・京都それぞれの被衣について述べる必要がある。そこで、これまでの調査内容を分割する方法をとることにし、今回は東北の染織文化に見る被衣

の受容と展開のうち、文献史料に記された近世の江戸や京都における被衣風習について記してみたいと思う。

1. 現存する被衣(芹沢銈介コレクション)

当館に所蔵されている被衣は14点(うち芹沢銈介蒐集4点・芹沢長介[東北福祉大学]蒐集⁴⁾10点)あり、その資料名・寸法等の基本データ、そして文様の分類に関しての詳細は前述の紀要³⁾に記載している。この研究は所蔵する被衣についての位置づけを行うことが目標であるが、現時点では十分に検討出来る所までできていない。しかし、まずは研究の根幹となる当館所蔵の現存被衣を1点紹介しておきたい。

「菊大紋に染分け小紋裾山水文被衣」(口絵1)

この被衣は、身丈121.0(cm)、衿59.0(cm)の大きさと、麻(苧麻)地に藍染で染められている。染色技法は、筒描と型染を併用しており、襟から背にかけて筒描による菊花の大紋が配され、型染の染分けは上から向かい千鳥、枝垂れ桜、稲妻に桔梗、小花の4段の文様を見ることが出来る。また、裾は山水文が筒描で描かれている。大紋に染分けの被衣は他にも現存するが、この資料同様、大紋と裾文様が黒に近い褐色地(濃紺)に筒描の手法で描かれ、染分け部分は主に縹色^{はなだ}で染められているケースが多く見られる。

被衣を被った際に頭頂部があたる部分に、花の紋が配されているこのような被衣を大紋被衣と称す⁵⁾。他には町、布、御所という名のついた被衣の文様構成もみられるが、柳宗悦に傾倒した芹沢銈介の被衣コレクションを考える上で、特出しているのが大紋被衣といえる。

この資料は、銈介の長男、長介氏による蒐集である。当館前館長であった長介氏は、父・銈介の「仙台にも陳列館を」という遺志を引き継いだことによって、館設立が実現した。銈介は長男の審美眼に対し一目置いており、長介氏が収集した資料が父に見せたことによって銈介自身のコレクションとなったケースや、さらに息子から贈られたものを日本民藝館の創始者、柳宗悦に寄贈したこともあった。このような経緯を踏まえ、銈介自身が蒐集したものの中に近似した「菊大紋に染分け小紋裾山水文被衣」(静岡市立芹沢銈介美術館所蔵)が含まれていることから、この被衣を当館の代表的被衣として取り上げるに至った。

この被衣の購入先店主の話により、これは新潟・越後上布の織り手が蒐集していたものであることが判明している。購入当時(1990年頃)被衣と言えは庄内地方のものという認識が強く、店主が購入する際、コレクターに対し入手した時期や場所を確認することをしなかったという。被衣の使用地域に関しては、秋田、青森と山形近県もあがっていることから、新潟で用いられていても不思議ではない。しかし、織り手という立場でもあるコレクターが研究対象としてこの染織資料に関心を持ったとすれば、新潟以外で収集した可能性もありうる。この時点での入手元を判断するのは困難であるため、この現存被衣や他の被衣を含め調査するにあたり、東北・新潟地方を中心にみる必要があるだろう。

この研究では、被衣の始原・発展の地である京都と、そこから派生し一時期被衣慣習がみられた江戸の実情把握を行う。ここでは庄内に被衣が伝わったと推測される1600年代後半の前後を含め、17～18世紀を中心に考察を行いたい。なお、この資料の調査を進める上で絵画を用いる方法もある⁶⁾が、今回は文献史料に記された被衣慣習を探る。

2. 江戸における被衣の規制と衰退

(1)文献史料に書き記された被衣慣習

江戸における17～18世紀の被衣慣習を知る上で、随筆や故実書等へ書き記されたものから手掛かりを探ることが出来る。しかし、その多くは100～200年前を回想して語られる場合がほとんどであり、そこにはそれぞれの内容に矛盾があるため、その真偽を見極めるのは難しい。よって被衣について記された数ある記述の中から、時代背景や具体的な根拠を導ける可能性の高い随筆を選択し、江戸の被衣慣習をみてみたい。なお、被衣の読みは文献によって異なる⁷⁾。

伊勢貞丈が記した武家故実書『貞丈雑記』には京都、江戸それぞれの被衣慣習について比較的详细な内容をみることが出来る。ここでは江戸の記述部分を取り上げる。

伊勢貞丈著『貞丈雑記』⁸⁾宝暦13-天明4年(1763-1784)の雑録⁹⁾

一【かずきの事】[略]江戸にては今はかずきする事なし。これは昔岩間八三郎と云う浪人十八歳なりしが、松平伊豆守を恨む事ありてねらいしが、かずきを着して近付き

女のまねして伊豆守を討たんとせし事ありし故、関東にはかずきを禁ぜられしなり。

ここでは、18世紀後期にはすでに江戸において被衣を用いていなかったことが記されている。その起因として松平伊豆守への謀反をはたらいた岩間浪人について取り上げられているが、貞丈自身の著作『安齋随筆』¹⁰⁾(成立年不明)にも「○かつきの事 江戸にてもありしなり 昔岩間八三郎と云ふ十八歳の浪人ありて 松平伊豆守殿をねらひ 女になりてかつきを着し故それより関東かつき法度なり」という同様の記述がみられる。そこで、松平伊豆守を襲撃する事件にあたるであろう記述を紹介したい。

『厳有院殿御実紀』巻四¹¹⁾

承応元(1652)年9月

十三日[略]今夜松平伊豆守信綱がもとへ。普請奉行城半左衛門朝茂が家人長崎刑部左衛門嘉林といふもの来りて訴へしは。別木庄左衛門。林戸右衛門。三宅平六。藤江又十郎。土岐與左衛門といへる處士。このほど無頼の悪少年をかたらひ黨をむすび。此十五日三縁山御法会畢をまちて。風烈しき夜。寺のほとり二三か所に火を放ち。寺に乱入し金帛を奪ふべし。(尾張記、公儀日記、正慶承明日記)

『厳有院殿御実紀』に記された首謀者は別木庄左衛門をはじめとする浪士数名であり、その中に岩間の名をみることができない。そこで岩間浪人首謀説を記述した文献をいくつかみてみたい。

柏崎永以著『古今沿革考』¹²⁾享保15(1730)年頃成立

しかれば応永、文明の比より、小袖かつきとはなりたりと見え侍る。今世は麻の一重をも用る事となれり。今も京都には用る。江戸表も以前はありしが、大猷院殿御法事の時、岩間八三郎といふ者、かつきにて女子といつわり、増上寺にて松平伊豆守をねらひける事あり。是より御停止とはなれり。

この考証書にも岩間説、そして享保年間に京都では麻の単衣の被衣が用いられていたことが記されている。また、斎藤彦磨の随筆にも次のように記されている。

斎藤彦磨『神代余波』¹³⁾弘化4年(1847)(下線部筆者)

○貴賤ともに女は他人に面みらるゝを恥べき物なれば都も鄙も被衣著(着)たるなり京都は今も町家の賤き妻さ

へ麻木綿などの被衣著(着)たり大江戸も昔はおしなへて著(着)たりしを浪土岩間八三郎といふ者被衣を著(着)て女の姿と成て松平豆州侯をうかゞひしに事露頭に及び八三郎は誅はれて江戸中被衣御停止となれり

この書の著者、斎藤彦磨は『貞丈雑記辨』『貞丈雑記評論』を記していることから、この内容は『貞丈雑記』を基にしていると考えられる。

著者未詳『関秘録』¹⁴⁾刊行年不明

○被の事

^{カツキ}被、江戸にても有し事なり。昔岩間八三郎と云十八オの浪人有て、松平伊豆守殿をねらひ、女に成かつぎを着しゆへ、夫より関東法度也。

『関秘録』には北畠永以こと柏崎永以の講釈も入っている¹⁵⁾ことから、この出典は『古今沿革考』にあると推測できる。しかし『嬉遊笑覧』¹⁶⁾の服飾「衣かつぎ」の項目には「[関秘録]にかつき江戸にも有しか昔岩間八十郎といふ浪人ありて女をまねかつ着きて仇をねらひより止みしといへるハ誤りなり 夫れハ寛文六年午十月の事に人相書あり」とある。また、寛文6(1666)年10月の『厳有院殿御実紀』にも岩間の名を見つけられず、この説の真偽はあいまいなままである為、異なる人物が関わる事件を次節で紹介したい。

(2)被衣(かぶりもの)規制の背景

前節では、17世紀中頃に起った岩間浪人による松平伊豆守への襲撃を、被衣使用停止の起因とする故実書や随筆を紹介した。ここでは『厳有院殿御実紀』に記された岩間とは異なる人物の事件を通し、『嬉遊笑覧』での岩間浪人説が誤りであるという指摘の真偽を検証してみたい。

神田白竜子『雑話筆記』¹⁷⁾享保15(1730)年(下線部著者)承久年中までは、江戸の女も京女の如く、物詣には被と云ふものをかぶりしと也、然るに承応年中○元年増上寺に於て崇源院殿○徳川秀忠妻の為に、万部の御修行ありし折節、戸次(別木)庄左衛門、林戸右衛門、藤江又三郎など云浪人、芝札の辻邊に住し、万部の節、かつぎをかむり参詣に紛れて、時の老中松平伊豆守信綱を窺ひし所に、事頭はれて皆々誅せられたり

江戸中期に活躍した講釈師の神田白竜子は、老中松平伊豆守暗殺計画に用いられた被衣のことを記している。ここでは

戸次庄左衛門、林戸右衛門、藤江又三郎という浪人の名が、前述した『厳有院殿御実紀』巻四の内容とほぼ一致するのである。承応元(1652)年9月13日に起こった承応事件を記したこの日の内容には、浪人達が被衣を用いたこと、そして被衣の使用が停止したことに一切触れていない。そこで、この節では、被衣に限定せず、この事件が起きた1650年前後に出されたかぶりものや覆面に関する法度をみてみたい。この時代の覆面禁止令において遠藤武氏¹⁸⁾が記しているが、その説を基にし、今回法度を補足することにより当時の時代背景とかぶりものの推移をみる。

『台徳院殿御実紀』巻九¹⁹⁾

慶長14(1609)年正月

二日立春。[略]布帛もて頬をからげ。其外何にても深く面をつゝみ掩ひたる者あらば。見受しまゝに誅すべし。この令違犯せば巖科に處せらるべしとなり。(令條記)

『大猷院殿御実紀』巻五²⁰⁾

寛永2(1625)年8月

廿七日[略]深く覆面するものあらば曲事たるべしとなり。(家譜、東武実録、條令、令條記)

『厳有院殿御実紀』巻十²¹⁾

明暦元(1655)年8月

二日[略]面をふかくつゝみかくして徘徊するともがらあらば。とがめらるべしとなり。(尾張記、憲教類典、條令)

『厳有院殿御実紀』巻十一²²⁾

明暦二(1656)年2月

此月ふれらるゝは。さきざき令せられしごとく。頬かぶり。頬ふくめんいよいよ停禁せらるゝにより。編笠の下にもかたくなすべからず(大成令)

江戸時代に入ると、幕府は顔を隠す行為を規制しその度合いを強めていくのが、これらの法度を通して見ることが出来る。その要因の一つとして考えられるのは、次のような事件だったと考えられる。

『厳有院殿御実紀』²³⁾巻一

慶安4(1651)年7月

廿三日[略]この夜本郷にすめる處士丸橋忠彌。黨をむすび不軌をはかるよし訴人あり。にはかに町奉行石谷十蔵貞清行むかひ。忠彌并に徒弟三人。妻子ともにめしとらへ獄につなぐ。又その魁首油井正雪は。駿河にありと

聞えければ。新番頭駒井右京親昌追捕の事命ぜられいと
ま給ふ。(日記、水戸記、正雪一件)

廿七日[略]この廿五日訴人ありければ。速に人々行む
かひしに。正雪はいそぎ其用意して。主従九人ともこと
ごとく自殺し。[略](正雪傳、武野燭談)

この「油井正雪(慶安)事件」という社会不安を煽った事件
を境に、覆面は「曲事」から「停禁」という禁止を強めた傾向
がみられる。このような政情不安から、かぶりものを用いる
行為に幕府が警戒し、顔を隠すことを厳しく規制していった
のであろうか。

なお、慶安事件の記述に「丸橋忠彌」という浪人の名がある
が、ここでこの名が記されている随筆を紹介したい。

松岡行義『後松日記』²⁴⁾ 卷之十二

○又季冬問[略]

被の事。略、

慶安の頃、丸橋某、女の姿に偽て、被をとぐめられたり
といふ説あり。然れ共、野外の忍びありきに用ひんはい
まも難なかるべし。城門の出入はならぬなるべし。

久留米藩士であり有職故実家であった松岡は、この書に有
職故実だけではなく、江戸から久留米に戻る途中、京都に滞
在した際の日記を交えている。

松岡は慶安事件の際、丸橋が被衣を用いたことが停止の原
因となった説を記している。また、この後半に記された「野
外の忍びありき」に被衣を用いるのは難がないと記されてい
ることも興味深い。城門の出入りの際、被衣を用いることが
出来ないということに関して、話し手の(平沢)季冬がどの
地域の被衣風習を話しているか明確ではないが、おそらく京
都もしくは久留米の可能性が高い。

被衣を被り女姿に似せて事件を起こし、江戸における被衣
使用の衰退の契機を作った事件を検証したが、『雑話筆記』で
の「承応事件」、そしてこの「慶安事件」と、どちらにも確証を
得ることが出来なかった。しかし、時代背景や文献史料によ
る裏付けから、現時点では「慶安事件」がかぶりものの衰退に
拍車をかけた可能性が高いように思われる。

「慶安事件」による幕府の規制とともに、かぶりもののスタ
イルが一新する契機となった出来事が次の史料に記されてい
る。そこで次は、被衣の禁止において浪人の悪事に用いられ

たこと以外の視点で捉えてみたい。

財津種英『八十翁嚙昔物語』²⁵⁾ 寛延年間(1748-51)頃成立
むかしは[中略]徒歩の時は、ふく面、かぶり物して、眼
ばかり出し候故、御旗本の奥方、息女等の顔見る事なし。
息女は、七才以後は人にまみえず。召使も、腰元位までは、
覆面して、又は綿にてかほをかくし、明暦の比迄は、針
めう、腰元、かつぎいたゞきてありきし。萬治の比、江
戸中かつぎ止む。酉の年、大火事以後、女かちにてあり
く時、ふく面の上に、玉ぶちというあみ笠をかぶりし。

享保の頃に80代であった新見老人²⁶⁾による回想によれば、
明暦以前、針妙や腰元は被衣を使っていたが、萬治(1658-61)
の頃には江戸中の被衣を使うことはなくなったという。その
時代に何が起こったのかを考える上で、「酉の年の大火事」が
手掛かりになる。

『厳有院殿御実紀』卷十三²⁷⁾

明暦3(1657)年正月

十八日[略]本郷丸山本妙寺より火おこる。去年より早
うちつゞき。ことに冬より春にいたり。また一雨もな
かりしかば。泉井ほとんど涸て。消防のたよりを失ひしに
より。一瞬の間に大火となり。[略](尾張記、紀伊記、
日記、正慶承明日記、亀岡記、武蔵鑑、御側日記)

大火事とは、おそらくこの記録にある明暦の大火を指すの
であろう。先に述べた政情不安による覆面・かぶりものの規
制が行われ、火事による家財等焼失が重なり、一気に被衣風
習がみられなくなった可能性も考えられる。

また、大火事以後に用いられるようになった笠の記述につ
いても、少し触れてみたい。この『八十翁嚙昔物語』には、旗
本の妻女などが外出する際に覆面を用い、明暦の大火以後は
その上に「玉ぶちというあみ笠をかぶりし」と記している。
覆面に玉縁笠をかぶるとは、どのような姿であったか^{なるかわ}生川春
明の『近世女風俗考』²⁸⁾にその記述と図が示されている。

・寛文十一年印本 家内幸蔵 町戴

是玉ぶちといへる編笠なるべし 玉ぶちといふハ 白革
にてふちをとり □□との也 又曰編笠の下に黒く見へ
るハ奇特頭巾なり

この『家内幸蔵 町戴』の原本の確認は出来ていない。し
かし寛文11(1671)年印本とあることから、大火より14年
後に成立、『八十翁嚙昔物語』の内容を裏付ける史料といえる。

被衣使用の衰退によって、玉縁笠を被るようになることも考えられるが、江戸のかぶりもの規制に関して曖昧な部分があるため、今後も新たな史料を探索する必要があるだろう。

『八十翁疇昔物語』の内容は、前述した生川の『近世女風俗考』にも記されているが、この記述には、前述した他にも重要な内容を見ることが出来る。

生川春明『近世女風俗考』²⁹⁾ 明治28(1895)年[生川没後刊行]

被衣の事 (下破線部著者書き下し)

或書享保十二年八十八歳老人筆記六之巻に曰「上略あるひハ下女二三人もつれる女中も麻の被衣と申ものをかつき紫の染革足袋をはきて歩行申にて之有候処に七八十年斗以前ハ右の被衣と申もの引かつきたる女中とてハ見かけ申さず候云々」ここに七八十年斗を享保十二年より逆算するに万治の頃にあたる また昔々物語享保十八年新見老人の筆記に曰「むかし明暦乃頃迄針名腰元被衣をいたゞきありきしに万治乃頃被衣すきとやむ云々」あり両老哲の話によるときハ明暦万治の頃より被衣ハすたりし成べし是ハ塗笠編笠其頃より 明暦万治をさす 時花出しより被衣ハ廃せしなるべし

ここに挙げられた、享保12(1727)年に88歳であった老人の随筆と、新見老人から聞き書きした書の『昔々物語』³⁰⁾こと財津種英著『八十翁疇昔物語』は、関わる老人の年齢と時代がほぼ重なっていることから、同時期の内容であると考えられる。これらの随筆により、被衣を用いる女性の身分や、着こなし、明暦期の被衣使用についてなど知ることが出来る。

ここで「享保十二年八十八歳老人筆記六之巻」の原本をあたってみたい。注目すべきは「下女二三人もつれる女中も麻の被衣と申ものをかつき紫の染革足袋をはきて」という部分であるが、その内容が次の見聞記にみることができる。

大道寺友山重祐『落穂集』巻の六³¹⁾ 享保12(1727)年以前御当地男女衣服の事 (下線部校注者・下破線部著者書き下し)

一、問て云、御当地(江戸)に於て貴賤の男女衣服等の義は、以前も只今も相かわる義は之無候哉。

答て云、さのみ替りたる義は之無候。但し我等の承り伝へたる義之在候。[中略] 四十年斗以前より巻物類を二ツ割、きぬ類は一は(幅)をそのまゝにして用ひ、うし

ろの結びめ杯をもおひたゝ敷大きに致さずしては叶わずことく罷成候かと存候。且又以前の義は下女の二三人も召れ、若党挟箱なとつれ候ことくなる、れきれき(歴々)ものゝ妻女と相見へ候女中までも麻のかつき(被衣)と申物をかふり、むらさき(紫)の染皮たび(足袋)をはきてありき申ことく之有候所に、七十年斗以来は右のかつき(被)と申ものをかふりたる女中とては見かけ申さず、[中略] 権現様参河に御座遊ばされ候節、我等祖父は知行五百石下に置かれ御奉公申上候節、妻をよひ迎ひ候刻、譜代の家来に負木と申物を持せて遣し女房にはかつき(被)をかふらせ、件の負木に腰を掛させ、うしろにおわけて呼ぶかえ候との事に候。

『落穂集』は10巻または11巻の写本として伝えられる。残された写本によって、掲載内容の違いがみられ、それぞれの巻の項目数が異なっている。「以前御当地男女衣服の事」は、史籍集覧所収の『落穂集』には脱落しているが、筑波大学付属図書館蔵³²⁾全10巻の『落穂集追加』の巻之六にみることできる項目である。

この巻の十に記された跋「享保十二孟春 知足軒友山八十九歳誌之判」³³⁾より、1727年の成立である事が分かる。一方生川は「上略あるひハ下女二三人もつれる女中も… [省略]」の引用が「或書」(享保十二年八十八歳老人筆記六之巻)であると記述している。その点をふまえ、著者89歳の成立である『落穂集』の記述内容、老人の年齢もほぼ同じことから、生川の「或書」とは『落穂集』可能性が極めて高いといえるだろう。

また「下女二三人もつれる女中も… [略]」の記述からは、次のようなことが分かる。「1685年頃より更に以前は下女を2、3人を連れ、さらに若党や挟箱を担ぐ従者を連れ歩く身分のある妻女が麻の被衣を被って、紫の染皮足袋を履いて歩いていた。」とある。つまり、17世紀中頃、被衣を用いていたのは身分の高い妻女で、麻地の被衣を被り、紫色の染皮足袋をはき、外出の際駕籠を用いず歩いていたことが推測されるのである。

生川は、おそらく『落穂集』から引用したであろう、被衣の内容について「七八十年斗を享保十二年より逆算するに万治の頃にあたる」としているが、享保12(1727)年から70～80年遡ると1657-1647年である。万治年間(1658-61)頃と

しているが、精査にするともう少し時代があがり、正保・明暦年間のあたりとも考えられるのではないだろうか。そうすると、先に述べた「油井小雪事件」と「明暦の大火」という時代背景、そして被衣停止法度が発布された可能性が考えられる覆面等かぶりものの規制時期をふまえ、万治年間(1658-61)頃の様子を記したと考察できる。これらは江戸において被衣が用いられなくなった事情を探る上で興味深い史料と言える。

3. 文献史料にみる京都の被衣慣習

江戸で被衣が用いられなくなった17世紀後半以降、京都では被衣がどのように用いられたのか、その推移をみる。

(1) 随筆『貞丈雑記』より

伊勢貞丈によって宝暦13年から天明4(1763-84)年の没年までに記された雑録に「かずき」の項目がある。先に述べた江戸における被衣の停止について浪人岩間八三郎の事件だけではなく、京都の被衣慣習についても詳しく記されている。そこで、古きより用いられてきた被衣と、現在用いられている被衣を対比させた興味深い記述を基に、貞丈が述べている古の被衣、そして宝暦13(1763)年頃の被衣慣習について記した箇所を検証したい。

伊勢貞丈『貞丈雑記』 天保14(1843)年[貞丈没後刊行]³⁴⁾

一【かずきのこと】古より女はよそへ出る時はかずきをするなり。今も都・大坂などの女はかずきをするなり。ふるき物語などに「きぬかづきの女」とあるはこの事なり。古のかずきは白きひとえの小袖なり。古き物語に「うすぎぬ引かづき」とあるはひとえなる故うすぎぬと云うなり。今は色々に染めてうら付けたるも有り、もようをも染めたるも有り。

ここでは、古伝の被衣風習やその仕立てについての記載だけではなく、18世紀末においても京都と大坂では被衣が用いられていたことを知ることが出来る。「古き」を何時頃と捉えるかにもよるが、『沙石集』弘安6(1283)³⁵⁾年には「傍ノ屏風二、白キ衣ヲ打懸タルヲ引落テ、打カヅキテ、軀而下向スルホドニ」と白い衣をかつぐ仕草が記されている。また『嬉遊笑覧³⁶⁾』には、『沙石集』の記述の他に「小童も女の如く衣かつき志たり 古画にみゆ今も 牛若丸五郎丸が体を書くに 白き衣をかつげるも 是なり」とあり、古くから衣を被っ

ている様子が推測される。絵画においても「一遍上人絵伝」(1299年 清浄光寺所蔵)には白色の被衣が多く描かれ、平安から鎌倉時代にかけて白の被衣が用いられた可能性がある。

『貞丈雑記』には仕立てについても記されている。「うら付けたるも有り」の記述について、調査を行った現存する被衣資料には一重の仕立てが多くみられるが、そのうちの一部に、被ったときに頭が当たる部分に絹(紅絹)で裏がつけられているものがある。貞丈が記した「うら」とは現存する資料にみられるこの仕立てのことなのか、もしくは全体に裏が付けられているものを指しているのかについてはもう少し調査が必要だろう。

かずきのたちぬい、常の小袖に替る事なし。えり形を前に下げて裁つなり。これはひたいへ深くかかり顔をかくす為なり。

[頭書] かずくとはかぶる事なり。かしらにかぶるなり。古き絵に両袖を下げてかずきたる体見えたり。

えりがたを前の方に三寸ばかりも下げてあくる事なり。かくの如くすれば、うしろへぬげず、顔もよくかくるなり。

この被りやすくするための工夫が見られる仕立ての記述について、【かずきの図】(図1)と共にみてみたい。【かずきの図】には肩から襟の位置までを「此間三寸ハカリ」とある。これまで採寸した被衣83点(芹沢銈介コレクション[東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館所蔵14点][静岡市立芹沢銈介美術館所蔵10点]・



図1『貞丈雑記』

柳宗悦コレクション[日本民藝館所蔵59点])のデータから襟肩下がりの平均を見ると(襟肩下がりのある被衣は83点中59点)約8.3cmであった。この結果からも、記述と現存す

る資料と近い数値であるといえる。

このように『貞丈雑記』の内容を検証すると、現存資料やこれまで行った絵画資料等から得られた研究結果とほぼ一致している。この史料には今回取り上げた風習以外にも、被衣姿が描かれた絵画に関する記述もあることから、今後絵画資料を用いた内容を記す際にその部分を取り上げてみたい。

被衣に関する詳細な記述は、18世紀以降に記された資料に多く残されている傾向がみられる。江戸では用いられなくなったが、京都ではいまだ用いているという内容が主であり、仕立てや着こなし、色彩、染文様などの被衣の特徴が記されていることが多い。そこで他の記述からも、被衣の流行を考察したい。

(2)『近世女風俗考』

生川春明『近世女風俗考』明治28(1895)³⁷⁾には、刊行以前に記された文献から抽出した記述の他に、被衣の図とその詳細が記されている。

被^{かづき} 図の如く貞享元禄の頃ハ振袖の被衣も有りしなるべし元禄二年印本西鶴が作桜陰秘事にも此図にひとしき被衣を画けり○さて近古の製ハ紺と白の二色なりと古きものに見へたり貞享元禄の頃ハさまざまの色を染たるを着たるにや尾花に百色がわりの被衣といへる事もありまた宝永二年京師西鶯といへる人作せし御前独狂言にも絹かづきの八重染とも見えたり○今の世に古き被衣の残れるを見るに。黒。浅黄茶などにて染めたり是ハ享保年間の



図2左『近世女風俗考』被衣図



図2右『女用訓蒙図彙』(静嘉堂文庫所蔵)被衣図

ものなるにべし○享保の頃画ける被衣の図を見るに多くハ甲菊半。梅花。を頂のあたる所に染たり

この記述には被衣における多くの情報が記されている。ここでは風習に関する箇所にとり、関連史料を挙げて考察してみたい。

「図の如く貞享元禄の頃ハ振袖の被衣も有りしなるべし」

この挿絵(図2左)は図中左部分に記されているように『女用訓蒙図彙』³⁸⁾の挿絵(図2右:静嘉堂文庫所蔵)の引用である。両図を比較すると、襟と裾の箇所が黒く塗りつぶされている点が異なっている。比較に用いた『女用訓蒙図彙』は元禄以後に元禄元年版の板木を使って再刷したものと言われている。³⁹⁾この序文によれば、本来祝言や婚礼儀式について婦人の心得であるべきことを述べるのが目的であったようだが、それだけに止まらず婦人生涯の儀礼教養まで説き及んでいる。被衣は衣服19図に含まれており、単衣や緋袴に始まり、下帯、丸綿、足袋など付属品が続き、最後に被衣が記されている。その順序からも、当時の被衣は、衣服の中において主要なものというより付属品のひとつと捉えられていたと推測される。

また同書巻三は内題が「当流女用鏡刊三」とあり、「模様姿比并紋尽帯拘⁴⁰⁾之品」婦人の衣装着用の姿22点等が図示されている。その中に、花葵唐草文の小袖姿の女性が被衣を用いている姿(図3)⁴¹⁾をみることができる。紋づくしということから、各図文様名が記されているが、この頁においては小袖の文様しか記されておらず、被衣については特記されていなかった。描かれた被衣は、前述した衣服に図示された被衣と同じ文様構成の亀甲文様で、当館所蔵の被衣のよ

うな異なる型を用いた数段の染分けではなかった。しかし、亀甲文様に、裾・裾部分が染分けられている特徴は、日本民藝館蔵の「肩裾黒地亀甲文流水に松文被衣」と近似している。このように挿絵の文様構成を精査していくことにより、これ



図3『女用訓蒙図彙』(静嘉堂文庫所蔵)被衣着用図

まで設定が出来ずにいた現存被衣の使用年代をある程度推定する基準が見えてくるだろう。

被衣の挿図の転載や、生川が記した「貞享元禄の頃ハ振袖の被衣も有し」からも、この書の被衣記述は『女用訓蒙図彙』が基になっていると考えられる。

「元禄二年印本西鶴が作桜陰秘事にも此図にひとしき被衣を画けり」

井原西鶴の『本朝桜陰比事』⁴²⁾元禄二(1689)年印本に被衣の絵が描かれているとあるが、その話の内容は次のようなものである。

『本朝桜陰比事』巻五の一「^{かつけ}櫻に被る御所染」

京中の町人の婚礼は大かたは是にうちまかせてめいよなる事渡世と成ぬ。此礼銀は賀のかたより敷銀の高につもりて十分一を取ける。折ふしは秋のすゑ通天の紅葉見の歸さに。大振袖の當世娘さりとて御所かつぎの着ぶり。十人並といふ其上物なるを先に立。おふくろらしき人にあまた下女も付添。[以下略]

「被衣」という言葉が用いられている物語前半を要約すると、「仲人を商売としている夫婦のところに、通天⁴³⁾の紅葉見物に行った帰りの大振袖の御所染の被衣を用いた娘と母親らしき人が仲人屋に訪ねてきた。母親は持参金や性格、年頃を過ぎた歳であることなど話し、娘の縁談を依頼した。仲人屋は歳若に偽ろうと持ちかけても頑なに拒む母親に感心し、縁組に乗り気になる。しかし、この縁組を実らせた日に、新婦が被衣を着ていた娘ではなく、歳も上で、目の不自由な女性だった。」仲人屋が騙されたこの話には、被衣を用いる女性が「上物の当世娘」として描かれている。この一行が娘と母親、下女を連れているだけではなく、その場面の挿絵から従者を連れている暮らし振りの良い中流以上の家庭を想像させる。そのことから、この時代は、裕福な町人の妻女が外出の際に被衣を華やかに用いていたことが推測されるのである。「近古の製ハ紺と白の二色なりと、古きとのに見えたり、貞享元禄の頃ハ、さまゝの色を染めたるを着たるにや、尾花に百色がわりの被衣といへる事もあり」

この一文には、近古の被衣は紺と白の二色だったが、貞享元禄期(1684-1704)には様々な色で染めていたことを記している。「百色がわりの被衣」の意は、種々の色調をもつ被衣と想像できる。「尾花」はおそらく随筆と考えられ、この文献

にあたる事は出来なかったが、江馬務氏の『風俗史事典』⁴⁴⁾に『尾花』に関する記述をみる事ができた。『『尾花』に、下女一人つるゝほどの身はもはや被衣ぞあらまほし』とある。「百色がわりの被衣」の箇所ではなかったが、下女を連れて歩くほどの身分の女性は、被衣を持ってほしいという意から、女性の身分を示すものとして被衣が用いられていたと考えられ、重要な記述といえるだろう。

これ以降の記述にも特出すべき内容が続き、被衣における文様の流行や絵画に描かれた姿を取り上げている。ここで、今回の論文につながる重要な部分として、『近世女風俗考』に記された一文を紹介しておきたい。

「享保の頃画ける被衣の図を見るに、多くハ甲菊半梅花を頂のあたる所に染たり」

西川祐信「宮詣図」(図4)⁴⁵⁾(フリーア美術館所蔵)には、大紋被衣を被く女性が描かれている。18世紀において、被衣描写が見られる絵画や絵本挿絵の大半は西川祐信によって描かれ、その被衣の文様構成はほぼ大紋被衣である。特にこの「宮詣図」は着色されていることにより、被衣の色あいや大紋と裾の黒地や襷視色(薄縹色)に染められた上下異なる2種の中形らしき文様をみる事が出来る。また、「頂のあたる所」にある大紋は、現存資料に多くみられる菊ではなく、生川が記した梅花のように見える。描かれた被衣は、今回口絵で紹介



図4 西川祐信「宮詣図」(部分) 紙本着色【フリーア美術館所蔵】



図5 椿大紋木瓜文被衣【静岡市立芹沢鉦介美術館所蔵】

した当館蔵の被衣の文様構成が同じであり、また、静岡市立
 芹沢銈介美術館所蔵の被衣「椿大紋に木瓜文裾松皮取被衣」
 (図5)と近似している。

西川の手による絵画だけではなく、被衣姿を描いた近世絵
 画、そして現存資料の被衣、被衣慣習や流行を記した文献史
 料は数多く残されている。それらを用いた被衣風俗検証は次
 回に行いたい。

(3) 19世紀以降

先に記した『貞丈雑記』の刊行は19世紀だが、貞丈によっ
 て記されたのは18世紀であった。また『近世女風俗考』に至っ
 ては、19世紀末に刊行されているが、その内容に、刊行(執筆)
 当時における被衣使用については触れられていない。「今の
 世に古き被衣の残れるのをみるに」という記述は、被衣慣習
 というよりは被衣衣裳そのものを指しているように思える。
 そうすると19世紀末には、京都での被衣風習は衰退してし
 まったのであろうか。そこで、京都においては江戸のような
 被衣禁止令の記述がみられないことから、ここでは19世紀
 以降の被衣風習を文献資料と関連する絵画資料から探りたい。

享和2・文化6(1802-08)年に刊行された十返舎一九の滑稽
 本「東海道中膝栗毛」⁴⁶⁾には京都における弥次郎兵衛と北
 八の会話に被衣が出てくる。

〔北八〕「ヒヤアヒヤアいきた女がくる、きれいきれい」

〔弥次〕「じょうだんな女どもだ、みんな着物をかぶってく
 るわ」

〔北八〕「あれが被というものだ」

文学作品にみられるこのような2人のやり取りからは、19
 世紀初頭の被衣の存在がみえる。刊行当時の被衣姿は、天保
 4(1833)年「東海道五十三次」(保永堂版)⁴⁷⁾、終着地京都の
 鴨川に架かる三条大橋を渡る人々の中にみることが出来る。
 文様は定かではないが、江戸からの54場面には存在しなかつ
 た被衣姿が京都の場面に描かれていることから、この頃も被
 衣が用いられていたと推測できる。

また、嘉永6(1853)年に制作された歌川広重「六十余州名
 所図会 出雲大社ほとほと図」⁴⁸⁾には、吉祥文様が配された、
 色鮮やかな被衣を用いた女性がみられる。これは小正月の行

事の一場面を主題にしていることから、外出に用いたという
 よりは、儀礼用に被衣を使用したとも考えられる。

京都では、被衣が外出時のかぶりものの用途以外に、儀礼
 用の衣裳としても用いられていた。一つは現在の七五三の前
 身ともいわれている通過儀礼であった。男女三歳の霜月に行
 う「髪置」、男児五歳霜月に行われる「袴着」、そして女児七歳
 霜月に行われる「被衣初め」である。「被衣初め」は紐落とし
 とも称し、紐付きの着物から帯を締め、被衣を初めて着せる
 もので、その様子は西川祐信『女中風俗艶鏡』⁴⁹⁾享保17
 (1732)年刊の挿絵や春信や清長の浮世絵にもみることがで
 きる。19世紀における「被衣初め」が、なぜ七五三に変化し
 てしまったのかについては今後調査が必要である。

もう一つの儀礼は、祝儀被衣とよばれる被衣風習である。
 江戸末期に活躍した浮世絵師・歌川国芳が描いた「三定例之
 内婚礼之図」⁵⁰⁾に白無垢姿の花嫁が真っ白な被衣を被る姿が
 描かれ、京都では19世紀半ばまでは、祝儀被衣が用いられて
 いた可能性が考えられるだろう。

これらの文献資料や関連する絵画資料から、京都における
 被衣風習は、18世紀では格式高い町人によって用いられ、19
 世紀に入ると外出時のかぶりものから儀礼用の衣裳へと推移
 していると推測される。京都においてはおそらく江戸末期ま
 で被衣が使用されていたと考えられるが、地方に伝播された
 被衣風習⁵¹⁾のように、20世紀初頭まで用いたのかに関して
 はまだ研究が不十分である。そのこれらの点については、今
 後この時期の資料収集と調査の継続が必要であろう。

おわりに

被衣の記述を収集し調査を進めていく中で、それぞれの文
 献が他の史料へとつながり、被衣風習の様子がだいたい明らか
 になってきた。今回は被衣風習の起源、そして発展の地であ
 る京都と、京都から派生し、一時期被衣慣習がみられた江戸
 の2都に関する記述を精査することにより、江戸におけるい
 くつかに分かれた説の裏付けや、衰退の背景、そして京都に
 おける使用した女性の身分や年齢層を探ることが出来た。

当館所蔵の芹沢銈介、またはその蒐集の基となる柳宗悦の
 被衣コレクションに名付けられた「庄内被衣」を知る上で、今

回の2つの都の慣習を調査したことはまだ最初の段階に過ぎない。これを基に、被衣がどのような形で庄内に伝播したのか、そしてその京文化が、東北の地方において独自の展開をみせたのか等を今後調査する必要がある。18世紀の庄内地方における被衣慣習を記した文献も残されていることを確認したので、次号以降においてその史料の紹介と、庄内地方だけではなく、山形県の一部地域にみられた被衣使用に関する内容を検証したい。

被衣調査に関しては、現存資料、絵画資料、文献史料という3方向からの精査が可能である。現存資料は当館の所蔵資料をはじめとし、柳宗悦、そして吉川観方蒐集の被衣も合わせて調査することによって、蒐集地や文様構成、寸法等の差異が見られれば、被衣の使用地・製作地の区別の基準を見い出せる可能性も出てくる。また、絵画資料では、描かれた当時の被衣文様や地色、着こなしの流行を知る手掛かりになるだろう。

被衣の使用形態を把握し、東北で用いられ残された被衣、芹沢銈介コレクションの被衣を精査することで、その制作使用年代の特定と、京文化を受容した東北の染織文化がどのように展開したか探り、今後数号に分けて紹介したい。

註

- 1) 岡村吉右衛門「被衣(かづき)」『民藝』394号 日本民藝館 1985 p.3
- 2) 拙稿(東北福祉大学卒業論文)「被衣の系譜」 1998
- 3) 拙稿(東北福祉大学研究紀要第31巻)「東北の染織文化にみる被衣の受容と展開Ⅰ」 東北福祉大学 2007
- 4) 当館の蒐集には、芹沢銈介コレクションと東北福祉大学コレクションの2つに分かれ、東北福祉大学コレクションは、前館長故・芹沢長介氏の調査のもと蒐集されたものである。
- 5) 拙稿³⁾より 3. 被衣資料の比較・考察表(p.165-167) 参照
- 6) 被衣の調査を行うにあたり絵画資料も重要視しているが、かなり広範囲にわたるため、この論文とは別にまとめた。
- 7) 拙稿³⁾より 1. はじめに(p.157) 参照
- 8) 伊勢貞丈[享保2-天明4(1717-84)]『貞丈雑記』:『貞丈雑記1』 島田勇雄校注 平凡社 1985 pp.166-167
- 9) 天保14(1843)年成立 貞丈没後、弟子によって刊行された。
- 10) 伊勢貞丈『安齋随筆』:『増訂 故実叢書第廿二回 安齋随筆下巻』 今泉定介編集 吉川弘文館 1929 p.242
- 11) 『嚴有院殿御実紀』巻四:『新訂増補 国史大系第四十一巻 徳川実紀 第四篇』 吉川弘文館 1998年新装版 p.60
- 12) 相崎永以『古今沿革考』:『日本随筆大成第一期第十七巻』 日本随筆大成編集部編 吉川弘文館 1994 p.23
- 13) 斎藤彦彦『神代余波』:『燕石十種 第三巻』 森銑三他監修

- 中央公論社 1979 pp.66-67
- 14) 『関秘録』:『日本随筆大成<第三期>10』 日本随筆大成編集部編 吉川弘文館 1977 p.126
 - 15) 解題「関秘録」:同上 p.1
 - 16) 筠庭信節(喜多村信節)『嬉遊笑覧』:『存採叢書嬉遊笑覧』(上) 近藤活版所 1830 p.224
 - 17) 神田白竜子[延宝8-宝暦10(1680-1760)]『雑話筆記』:『日本随筆大成別巻 嬉遊笑覧一』 日本随筆大成編集部編 吉川弘文館 1979
 - 18) 遠藤武「覆面・被衣の禁と結髪」『遠藤武著作集』第1巻 服飾編 文化出版局 1985 pp.85-87
 - 19) 『台徳院殿御実紀』巻九:『新訂増補 国史大系第三十八巻 徳川実紀 第一篇』 吉川弘文館 1998年新装版 p.477
 - 20) 『大猷院殿御実紀』巻五:『新訂増補 国史大系第三十九巻 徳川実紀 第二篇』 吉川弘文館 1998年新装版 p.348
 - 21) 『嚴有院殿御実紀』巻十:『新訂増補 国史大系第四十一巻 徳川実紀 第四篇』 吉川弘文館 1998年新装版 p.151
 - 22) 『嚴有院殿御実紀』巻十一:『新訂増補 国史大系第四十一巻 徳川実紀 第四篇』 吉川弘文館 1998年新装版 p.173
 - 23) 『嚴有院殿御実紀』巻一:『新訂増補 国史大系第四十一巻 徳川実紀 第四篇』 吉川弘文館 1998 新装版 pp.17-18
 - 24) 松岡行義『後松日記』:『日本随筆大成 新装版<第三期>7』 日本随筆大成編集部編 吉川弘文館 1995 p.345
 - 25) 財津種英『八十翁嚳昔物語』:『日本随筆大成 新装版<第二期>4』 日本随筆大成編集部編 吉川弘文館 1974 pp.147-148
 - 26) 『八十翁嚳昔物語』の奥書「新見老人むかしむかし物語 老人は享保の初八十余歳、此の物語は、寛延年間に記したり」同上 p.168
 - 27) 『嚴有院殿御実紀』巻十三:『新訂増補 国史大系第四十一巻 徳川実紀 第四篇』 吉川弘文館 1998年新装版 pp.208-209
 - 28) 生川春明『近世女風俗考』:『日本随筆大成新装版<第一期>三』 日本随筆大成編集部編 吉川弘文館 1975 p.387
 - 29) 同上 pp.377-379
 - 30) 『昔々物語』(財津種英『八十翁嚳昔物語』):『日本随筆大成 新装版<第二期>四』 日本随筆大成編集部編 吉川弘文館 1974
 - 31) 大道寺友山重祐『落穂集』:『江戸史料叢書-落穂集-』萩原龍夫・水江漣子校注 人物往来社 1967 pp.156-157
 - 32) 『江戸史料叢書-落穂集-』刊行当時、『落穂集』(全10巻)は東京教育大学付属図書館蔵 序文(:31)に同じより
 - 33) 31)に同じ p.259
 - 34) 伊勢貞丈『貞丈雑記』:『貞丈雑記1』:8)に同じ 刊行不明本を底本としているが、校注者凡例によると、版本は天保15年版と同じとある。 pp.116-167
 - 35) 無住『沙石集』:『日本古典文学大系85 沙石集』 渡邊綱也校注 岩波書店 1969 p.99
 - 36) 16)に同じ p.223
 - 37) 『近世女風俗考』:『日本随筆大成新装版<第一期>三』 吉川弘文館 1975 p.379
 - 38) 奥田松柏軒『女用訓蒙図彙』万屋清兵衛出版 貞享4(1687)年刊:『女用訓蒙図彙』 田中ちた子ほか編 渡辺書店 1970 p.31
 - 39) 田中ちた子 田中初夫編纂「家政学文献集成続編江戸期第八

- 冊 解説」：38)に同じ pp. (1-7)
- 40) 編纂者補足によると「拘」は「抱」の誤りの可能性あり
- 41) 奥田松伯軒『女用訓蒙図彙』万屋清兵衛出版 貞享4(1687)年刊：38)に同じ p.120
- 42) 「日本名著全集江戸文藝之部 西鶴名作集下」日本名著全集刊行会 1929 pp.365-367
- 43) 通天橋：京都市東山区の臨濟宗東福寺内の橋廊
- 44) 江馬務『風俗史事典』：『江馬務著作集 第十一巻』中央公論社 1979 p.157
- 45) 西川祐信「宮詣図」フリーア美術館所蔵
- 46) 一返舎一九『東海道中膝栗毛』：『古典文学全集四十九 東海道中膝栗毛』中村幸彦校注 小学館 1980
- 47) 歌川広重「東海道五十三次(保永堂版) 五十三 京師」天保4(1833)年
- 48) 歌川広重「六十余州名所図会 出雲大社ほとほと図」(越村屋平助版)嘉永6(1853)年：写真掲載書籍『原色浮世絵大百科事典 第九巻 作品四 広重一清親』原色浮世絵大百科事典編集委員会 大修館書店 1981 p.60
- 49) 西川祐信『女中風俗艶鏡』：天明2(1782)年 墨摺絵本
- 50) 歌川国芳「三定例之内婚禮之図」弘化～嘉永5(1844-52)年頃 ポーラ文化研究所蔵 写真掲載書籍：『粧いの文化史 江戸の女たちの流行通信』ポーラ文化研究所・たばこと塩の博物館編 ポーラ文化研究所 1991 pp.92-93
- 51) 山形や青森において、20世紀初頭まで葬儀の際に近親者の女性が被って用いていた
- 図1) 『貞丈雑記』【かずきの図】：8)より転載 p.178
- 図2左) 『近世女風俗考』被衣図：37)より転載 p.379
- 図2右) 『女用訓蒙図彙』(静嘉堂文庫所蔵)被衣図：38)より転載 p.31
- 図3) 『女用訓蒙図彙』(静嘉堂文庫所蔵)被衣着用図：38)より転載 p.120
- 図4) 西川祐信「宮詣図」(フリーア美術館所蔵)：『浮世絵聚花・フリーア美術館 23』より転載 檜崎宗重 ハロルド・P・スターン共著 小学館 1981 p.66
- 図5) 「椿大紋木瓜文被衣」(静岡市立芹沢銈介美術館所蔵)